

狸囃子

泉鏡花作

全一章

はじめて其名を知りしはと、言出づるほどのものにもあらず。母上いまそかりし時、針箱のあたりに取散らされたる葛飾譚に、本所なる七不思議の、おいてけ堀、片葉の蘆、送提灯などある中に、狸囃子といへるがあり。囃子といふもおもしろし、狸とあるがをかして、幼き耳に覚えしが、如何なるものとも知らず、目のきよろりとして口の先の尖りたる先生が、ぼん／＼と腹鼓を打つなるべしとのみ思ひなしつ。

一昨々年の夏のはじめ、明日は庚申といふに、柴又へ詣でむと、其の心構して、朝疾くと思ふなれば、又不斷の、寝忘れては詮なしと、夜を徹したることありけり。大塚に住みたる頃なりしが、蛙の聲も耳に馴れては能くも聞えず、きヨ／＼と鳴くは時鳥か、覺束なし。向ひの原なる農学校の奥に、乳求めて犢

の鳴くが、寂寞たる夜陰を貫く。ものゝ二時にやならむ、音羽の通、鼠坂の下あたり、豆太鼓を打つ音す。絶えては響き、聞えては止むが、心着けば此の響今はじまりたるにはあらず、初夜過ぐる頃よりなりしを、物に紛れたるにこそ。

耳を澄ませば、題目に合して鳴らす、其よ、彼の幼きものが、「一貫三百何うでもよい、」と突込みて囃す調子なり。

然りながら、處も定めず、或は今いふ其の音羽のあたりと思ふに、遙に佛橋のあるあたりか、あらず、高田の馬場邊か、否、石切橋の最寄にや、やがては大塚の通を眞直に、板橋街道を此方に近づく氣勢すなり。其の状恰も汐のさしひきあるが如し。詮ずるに、あるがまゝの風に乗りつゝ漾ふらむ、調子も物に觸れては亂るゝなるべし。判然とはせず、定りたる音にはあらざりしが、這は彼の處々の講中の、夜を籠めつゝ柴又に詣づるが、幾組も間を措かず、大路小路を練るならずや。さては家の周圍二三町が程こそあれ、傳通院あたりまで行かば、三々五々同行

の衆しゅうに逢あふなるべし、をかし、明あくるを待まつことか
は、と茶着ちやつげにして支度したくを調とへ、其そのまゝ雪踏穿せつたばきにて立たち
出いでしに、樹立こだち深ふかき中の家いえにこそ、おもては早はや人ひと
顔がほも分わかつべかりしに、富坂とみざかを下おり、向むかうを上のほりつゝ、
本郷ほんがうの通とほりに出いづるまで、人ひとの影かげにも逢あはず。幻まぼろしか、
あらぬかと思みはるは、東雲しのゝめに光黄ひかりきなる提灯かんぼんつ點つけたる
まゝ、露つゆを寒さむみ辻つじに踞うづくまれる夜よなしの車夫くるまやのみなり
しが、大江戸おほえど八百八町ちやうといふ今いまはた其それにも増ましたり、
太鼓打たいこうちつ講中かうちゆうはいづれを行ゆかむもまゝなるべし。大おほ
塚つかより出いづるものと同道筋おなじみちぢのみかはと、敢あへて意いとな
さず。其後折そのちをりに觸ふれて思おもひ出いづる深夜しんやには、必かなず件くだん
の太鼓たいこの音おとするが、夜毎よごとなれば、日ひを經ふるに從したがうて、
次第しだいに心留こゝろとむるやうになりて、怪あやしと思おもふに、益々ます／＼
怪あやしうなり増まさりぬ。

恚いかくて一友いゆうに會くわいせし冬ふゆの夜よのしと／＼雨あめに、其事そのこと
語かたり出いでたれば、其それこそ、江戸紫昌記えどはんじやうきの出來できたる頃ころ
も、今いまも絶たえざる狸囃子たぬきばやしよ、となむ教をしへける。

なほ其そのの友とも、嘗かつて根岸ねぎしに住すみたるに、申まをす如ごとき怪あや
しの樂がく、上野うへのの森もりに起おこること連夜れんやなれば、起おき出い

で、奴が樂屋の様子見むとあさりしこともありし由。

本所には限らずと覺ゆ。大塚を越して、今の榎町にても、同じく聞ゆ。彌生の頃は春の夜のものゝけはび何となうさんざめいて、御すさみ餘り盛ならず。

青葉の頃よりして、夏の夜、秋に入れば、ボンノ様愈々冴えて、隊長大得意を顯すなり。

音も人の心によりて違へり。彼の時は庚申のことありしより法幸の太鼓とや聞かれけむ。今日は演習のありつるよなど思ふ時は、奏樂つるべ撃つ大砲の筈の如く、恰も太平記の初巻を讀み居れば、瀬多の長橋とゞろ／＼と蹈鳴らすも慙くやと聞ゆる。されば酒なく美人なき夜は、机の上に頬杖して、狸的が又やつてるぜ、と人知れずこそ微笑まるれ。

【完】